

第1回板橋区創造都市推進会議会議録

【日時】 令和7年12月2日（火）18時～20時

【場所】 板橋区役所本庁舎災害対策本部室

【出席者（敬称略）】

<外部委員>

※五十音順

アンドレア・ボンピリオ（オンライン参加）、黒木 正郎、高木 伸哉、田中 拓男、
氷見谷 直紀、別府 明雄、宮城 聡、山口 謠司、渡辺 治、松下 耕（欠席）

<内部職員>

技監、政策経営部長、区民文化部長、産業経済部長、まちづくり推進室長、教育委員会
事務局地域教育力担当部長

<顧問>

佐々木 雅幸

<事務局>

- ・板橋区長
- ・阿部ブランド戦略担当課長
- ・政策企画課 ブランド・SDGs 係

【次第】

1. 開会
2. 委嘱式
3. 出席者紹介
4. 会長及び副会長の互選
5. 創造都市いたばしの推進に向けて
 - ・UCCN 申請に向けた戦略的なご助言（顧問：佐々木雅幸先生）
 - ・創造都市いたばしの推進に向けて（板橋区長：坂本健）
 - ・各委員の皆さまのお取組や意気込みについて
6. 板橋区創造都市推進基本方針の策定について
 - ・「みんなに かけ橋 いたばし創造都市宣言」案について
 - ・板橋区創造都市推進基本方針案について
 - ・ユネスコ創造都市ネットワーク(UCCN)加盟申請スケジュールについて
7. 第2回板橋区創造都市推進会議について
8. 閉会

【配布資料】

次第

資料 1： 出席者名簿

資料 2： 創造都市いたばしの推進に向けて

資料 3： 「みんなに かけ橋 いたばし創造都市宣言」案

資料 4： 板橋区創造都市推進基本方針（案）

参考資料： 板橋区創造都市推進会議設置要綱

【議事録】

1. 開会

事務局：開会挨拶

・会議の開催に先立ちまして、本会の設置趣旨についてご説明いたします。板橋区は区民の創造力を活かし、文化と産業を発展させる「創造都市」の実現を目指しております。

・あわせて、絵本の創造性や地域の印刷製本産業などを活かした「絵本のまち板橋」の取り組みを強化し、国際的な発信も進めていく方針でございます。

・これらを効果的に推進するため、ユネスコ創造都市ネットワークへの加盟も視野に入っております。この推進会議は、これらの施策を総合的に検討し、区への提言を行うために設置されました。皆様のご知見を賜りながら、板橋区の創造都市づくりを進めてまいりたいと考えております。

2. 委嘱式

（区長より各委員に委嘱）

3. 出席者紹介

（委員）

・委員名簿には日本郵政建築株式会社とありますが、これは郵便局の会社の建築部門でございます。以前は日本設計という大手設計会社におりまして、建築の設計を行っておりました。設計だけでなく、最近は既存の活版であるとか、文化財への登録といったことにも携わっておりまして、文化的なまちづくりに貢献できればと思っております。

（委員）

・私は中国と日本の古典籍の目録を日本中で作っておりまして、ヨーロッパにある本や日本にある中国の本など、古典籍の目録を作成し、どこにどういう風に散らばっていたのかということを研究しております。

・現在は平成国際大学で情報デザイン学部というものを立ち上げまして、来年の4月から新しく学部を新設して動いていきます。研究所も一つ持っておりますので、そういった文献の調査なども行っております。どうぞよろしくお願いいたします。

（委員）

・編集プロダクションを主宰している編集者です。主に扱っているのは建築を中心に、まち

づくりからインテリアデザイン、プロダクトデザインまで、デザイン一般を取り扱う本の編集と出版を行っております。私のバックグラウンド自体は建築設計ですが、その後、現在の編集プロダクションを主宰しています。板橋区とはご縁がございまして、本区南館を建築する際の建物を紹介する冊子ですとか、最近では「板橋マニア」という名前で、板橋の観光振興のための出版物を作成しました。趣味人を集めて街歩きをしてもらい、余所者の視点で板橋を紹介してもらおうというマニア本で、第2弾も作成させていただきました。まさに板橋のリソースを集めるという活動をしております。よろしくお願いいたします。

(委員)

・本務先は、和光市にあります理化学研究所の研究員をしております。専門は光学でございます。私自身は関西人なのでこちらに来るまで知らなかったのですが、板橋区にはたくさん光学関係の会社もありまして最近はいくつか共同研究などをさせていただく機会もありました。何らかの形で光学を通して板橋区に貢献できればと思います。よろしくお願いいたします。

(委員)

・区長とは、若かりし現場で2年半「戦いの庭」と言いますか、日本設計の社員はやったことではないのですが、手伝いに行った時にチームに引きずり込まれて、とにかくこれをやれと言われて2年半から3年ほど毎日戦いの庭にいたという戦績があります。

・アメリカに少し留学したことがありまして田園都市に住んだ経験があります。都市問題を解決している街だったのですが、そのような街を作りたいと思って日本に帰ってきてから「ジョンソンタウン」（入間市）というのをやってくれという話があり、20年間作り続けています。今年も2棟やりますけれども、コミュニティがお互いに支え合って、気遣いながら楽しく暮らしている街ができたので、2年前に区長が見学に来られて「このような街づくりを板橋区でやってくれないか」という話から再会しまして始まりました。文化によって孤独などが解決するのではないか、そのような力を信じてこの会に参加させていただいております。よろしくお願いいたします。

(委員)

・私は東京育ちですが、約20年前に静岡の県立の劇団、劇場に行かないかと言われてまして以来20年静岡に住んでおります。本施設は日本のような箱だけある劇場ではなく、「劇団かつ劇場」というヨーロッパ型の劇団もある公立の劇場です。そこの芸術総監督をやっております。

・東京で活動していた時は、1年の半分くらいは東京で活動し、残りは海外で活動するという動き方をしていました。なるべく自分たちの文化的なナショナリズムに陥らないように、相対化できるようにと考えてやってまいりました。相対化できるようになっていくことによって、最終的に自分たちの文化に対しても誇りを持てるようになるという考え方です。

・一方で、20年前から行政と一緒に取り組んでいますので、芸術家あるいは文化の専門家

が行政とどのように組んでいくのか、どうやってチームを作っていくのかということもそれなりに経験いたしましたので、何かしらお役に立てることがあればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

(委員)

・皆様が建築のお話をされましたので、私も一応テレビ東京にいる時に天王洲のスタジオというのを作っておりまして、250 坪と 200 坪のスタジオ、それからテナントさんの部屋を入れると全部で 5000 坪あったのですが、テレビ東京での担当者は私一人だけでした。テレビ東京を退職した後は、区教育委員長をやらせていただいた後に、観光協会におります。

・個人的な話になりますが、「成増童謡まつり」というイベントを行っております。これは成増の近くに「靴が鳴る」や「叱られて」という童謡の作詞をされた清水かつらさんという方が和光市に住んでおられたので、その方を顕彰するための研究と活動ということで開催しております。今年で 34 回が終わりました。地元の子供たちを中心に、大人のグループもありますが、「靴が鳴る」や「叱られて」を歌い継いでいこうというのが趣旨でございます。

・今年は 10 月の第 3 土曜日に開催し、お琴と三味線の伴奏で童謡歌手が歌う企画を行いました。非常に好評でした。また、もう一つの取り組みとして「武者行列」を実施しています。主催は郷土資料館ですが、そこで使う鎧作りからすべてやっており、現在はおよそ 60 領ほど揃っているかと思います。武者行列は年に 3 回行っています。

・以前は私自身も武者行列に参加していましたが、最近は観光協会の会長という立場から、区長と二人で並んでテント前に立つ立場になり鎧は着ていません。今年の梅まつりの際には、着られるのではないかと考えています。梅まつりの時期には鷹匠さんにも来ていただき、かつて板橋区・高島平周辺が鷹狩場であったことを再現する実演も行っていました。以上です。よろしくお願いいたします。

(委員)

・今回の本会議出席の経緯につきましては、中央図書館のすぐ真向かいの土地に 8,000 平米ほど本学の土地がありまして、今までは宿舎として使ってございましたが、今後、これを廃止して再開発をするということになり、それがご縁で今回坂本区長に声がけをいただいたところでございます。

・前段の話以外にも筑波大学といたしましては、板橋区内に障害を持った子供たちのための学校として附属学校がございましてこれまで非常にお世話になっております。

・文化の関係であれば、本学の学生が毎年夏に開催されております絵本の関係の講習会に毎年抽選を経て参加させてもらっており、大変お世話になっております。私自身は文部科学省からの出向で現在、筑波大学におりますが文部科学省での経験なども可能であればこの場において活かせる事ができましたら大変ありがたいというふうに思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

(委員)

・本当に皆さんと直接対面してお会いしたかったのですが、今日はオンラインでの参加になってしまいました。

・実は私は父親がイタリア人、母親が日本人ということで、2つの視点を持ってずっと生きてきています。活動としては、若い頃から常にこの2つの文化、あるいは多数の文化を繋げていくということを行ってきました。主に僕の活動というのは企画制作ということで、イベントの制作とかラジオという形で様々な文化とコネクしていくということが作業となっていました。

・ただ、3.11 をきっかけとして私の中で色々な価値観が変わっていき、未来に向けて豊かさとは何なのかというテーマの中で、テレビ、特に NHK の方で様々な企画をやらせていただいて、プレゼンターとしても様々な番組に参加してきました。大きく言えば、デザインという切り口で様々なソリューション、解決策があるということに気がついてきて、どんどんデザインの世界に入っていくということになり、渡辺委員のご紹介で今回この会議に参加させていただいています。

・私としては、プロフィールにも出ているのですが、ブロードキャスターをしつつも6年前にオランダの方に家族とも移住しまして現在は二拠点生活を続けています。オランダで僕が会った大きな答えといいますか、これからの未来を想像する上で特に文化という切り口も含めてですが大きなヒントに出会えたところがあります。

・私としてどうやって今回この会議に賛同できるかプラス貢献できるかというところでは、多分2つの文化、あるいは多数の文化と繋げていくという要素が今後すごく必要な時代になってきているのではないかと考えております。今後こういった形で僕が貢献できるかということも模索しながら、皆様のご意見といろんなアイデアも含めて交換できていければなと思っています。今後ともよろしくお願いします。

事務局：(事務局の出席者を報告)

4. 会長及び副会長の互選

5. 創造都市いたばしの推進に向けて

①UCCN 申請に向けた戦略的な助言

(顧問)

・私は板橋区とは色々なご縁がございまして、実は25年前にイタリアのボローニャ大学へ留学をしておりました。板橋区がボローニャ市と、特に絵本の関係で連携をされて万博の時にもこちらへ来ました。それが板橋区と私の関係の一つでございます。

・それから私は金沢大学に15年間在籍しており、金沢の前田家、加賀藩の下屋敷というのが板橋との関係があるということです。それで7月に亡くなった山出元市長と私が一緒にユネスコ本部に行きまして創造都市ネットワークへの加盟申請をさせていただいたということがございました。

・ボローニャから戻った翌年の2001年に『創造都市への挑戦』という本を書きました。こ

の前年に私の友人のチャールズ・ランドリーというイギリス人が『The Creative City』という本を出しておりまして、2002 年にアメリカのリチャード・フロリダが『The Rise of the Creative Class』という本を書いておりまして、21 世紀の初頭にクリエイティブシティという言葉が、新しい都市のあり方として注目をされることになりました。

・私の創造都市に関する本に書いてある定義を本日は参考資料で出させていただいております。本会議の設置要綱の第 1 条の冒頭に「嘆語の定義」という形でまとめていただいております。学者としての定義になるのですが、まずそこに住んでおられる市民一人ひとりが創造的な暮らし、創造的な活動、そして創造的に働くということが最も大切であり、文化と産業が創造性に富んでいることが都市の特徴になってまいります。

・当然ですが、大量生産・大量消費を乗り越えていく新しい社会のあり方につながり、そのことを通じて、現在 SDGs と言われておりますが国連が目指しているような社会課題を解決するという形になります。特に都市の中に創造の場をたくさん作っていったらどうかという形での政策論にしております。

・今日は文科省の方も来られておりますが、現在、文科省の中で国際統括官が担当しておりますユネスコ国内委員会、このユネスコ国内委員会の協力を得ながら私どもは活動しております。同時に文化庁の方でも、文化庁長官表彰など創造都市ネットワークを国内で作る上でも支援をしていただきました。

・事務局からの紹介では、UCCN 申請に向けた戦略的助言と書いてありますので、そちらの方に焦点を移していきます。創造都市ネットワーク自体は 2004 年からユネスコが始めております。私が本を発行し中国、韓国でも翻訳されておりましてアジアで広がっておりますが、イギリス、アメリカ、そしてアジアでも広がってきて、ユネスコが文化多様性宣言というのをしたのが 2001 年です。創造都市ネットワークを提唱したのが 2004 年、そして文化多様性条約というユネスコ条約がありますが、これが 2005 年のことです。つまり 21 世紀の初頭に、国際的な一つの潮流が、主にユネスコが絡んで進んでまいりました。

・当時を振り返ってもらいますと、今のトランプ大統領とは反対で、アメリカは WTO 体制で貿易自由化の先頭を走っておりました。そこで議論されたのは、自動車とかハイテク製品の関税ゼロだけではなく、映画とかテレビ番組のコンテンツ、こうした文化性製品についても関税ゼロだということを言ったわけです。それを実際に世界貿易機構（WTO）体制で進めてきた。その時、ヨーロッパのフランス、イタリアという元々シネマ産業の祖国の方が、ハリウッドにグローバル化の波の中で敗北するのではないかという危惧感がありました。そこで、グローバル化が急速に金融経済の側面で進んでいった時に、文化の多様性が損なわれる危険性がある、それを文化の画一化というふうに呼んでおりました。

・ここでのポイントは「文化多様性」という言葉をユネスコが重視しているということです。グローバル社会の中で文化多様性を守ったり、あるいはそれを拡張していくという立場に立つ。それはなぜかということ、生物多様性という言葉があります。グローバル化の中で生物多様性が損なわれるということで、国連は生物多様性条約を結んでいます。この論理

を文化に応嘆したということです。

・したがって、グローバル化の波の中で文化の多様性を世界に広めていくという立場に立って、我々が提唱した「創造都市」という言葉を、その文化多様性と結びつけました。

・創造都市の経済的エンジンの一つは「創造産業（クリエイティブ・インダストリー）」と呼びました。これはイギリス政府が定義化して 13 業種を挙げていますが、アメリカは 14 とか 15 とか考えていますし、日本でも私どもは創造産業というものを一応定義化してきましたが、都市が創造産業で持続的に発展していけるように支援しましょうということ考えたわけです。

・そこで 2004 年の段階では、創造分野、創造産業の分野というものを 7 つ選びました。7 つの中には音楽、文学、メディアアート、クラフト&フォークアート、それから食文化（ガストロノミー）、デザイン、そして映画です。今は建築も加わり 8 分野になっています。

・この創造都市ネットワークの初期の時から加盟したのがボローニャでした。日本では 2008 年に名古屋市と神戸市がデザインの分野で入り、その後 2009 年にクラフト分野が新たに加わり、世界で最初に金沢市がクラフトの創造都市ということで認定されました。

・私はたまたま三つの都市のアドバイスをしておりました関係で、当時は松浦晃一郎氏がユネスコ事務局長で時々意見交換をさせていただいておりました。その経緯もあり、直近の越前市も含み現在のユネスコ創造都市に対してアドバイスを行っています。

・これから板橋区は分野の選定をしっかりと行う必要があります。日本の場合、三つの都市がデザインで既に認定されていますが、それぞれデザインへのアプローチは違います。例えば名古屋市は、自動車産業に次ぐいわば次の産業としてデザインをターゲットに決めて、国際デザイン博覧会をやりながら、国際デザインセンターという現在中核となっている施設をつくって、そこでデザイン産業を推進するという政策をとりました。

・一方、神戸市の場合は、1995 年に阪神・淡路大震災で都市が壊滅的な被害、いわば崩壊をしたのですが、そこから 10 年で物理的には復旧したものの、心の復興が課題だということで、10 年目から創造都市を考えるようになります。神戸市では都市の包括的なデザイン、暮らしのデザイン、ものづくりのデザイン、まちづくりのデザイン、まちのデザイン、こういうかなり広い概念として「デザイン」という言葉を使っています。それはユネスコ側からするとやや理解しにくいということもありましたので、いろいろ工夫をしました。

・もう一つ、比較的最近に旭川市がデザイン都市になっています。東京にいと旭川市がなぜデザインなのか、わかりにくいと思います。というのも旭川市は家具の産地です。家具デザインに関するさまざまな取り組みがありまして、主に家具の業界が中心になって、デザインウィークとデザインセンターをつくっています。デザインウィークは 10 年続いている実績があるので、デザインが産業の中に実装されていくのです。デザインが産業として独立しているというよりも、むしろ産業の核の中にデザインがあって、それで雇嘆が生まれるということで特徴がはっきりしています。そのために上手くいくのです。都市の歴

史や産業の特徴と結びつけて、積極的に申請書を書くことができれば、認定を受けられます。実は、世界遺産、特に世界文化遺産と違って、現地調査なしで申請書ベースになります。このため申請書の出来不出来というのはとても大事になりますが、私自身の経験からいくと、やはりデザイナーがデザインして、なぜこの「まち」がデザインを重視しているのかを、その歴史的な流れから解き起こして、先ほどの「ストーリー性」を持って説明していく。そして、実際にデザイン産業としての雇傭がどの程度あり、どのようなマーケットがあるのか。マーケットはフェアであり、フェアとフェスティバルとの二つの関係がしっかりしなければならないです。フェスティバルは単なるお祭りです。フェアとはマーケットで、ビジネスとしての数値をそれぞれ確保する。そしてさらに、デザイン産業とそれ以外の7つのジャンルとの関係性、それで人々がその中にどのように参加しているか。それが問われるわけです。

・現在、特に大事なものはSDGsであり国連の大テーマです。ユネスコはあくまで国連の専門機関ですから、創造都市ネットワークの活動を通じてSDGsの実現にどのように貢献できるのか。とりわけ、ユネスコが今関心を持っているのは、「モンディアカルト(MONDIACULT)宣言」という国際的な文化政策に関する宣言があります。最近ではメキシコシティで2022年に開かれ、今年の秋にバルセロナで開かれました。ここで出てきた「モンディアカルト宣言」の中で示されているミッションにどのように貢献できるかという問いかけに対して説明する必要があります。短い文章ですが、隙のない緊張感の高い申請書ができれば、認定を受けるということになろうかと思います。差し当たっては、このあたりで終わりたいと思います。ありがとうございました。

②創造都市いたばしの推進に向けて

板橋区長：(資料2を説明)

③各委員の皆さまのお取組や意気込みについて

(委員)

・私も板橋区民です。大東文化大学に入学後にずっと大山に住んでおります。いたばしPayも使っておりますが、日本ペンクラブの理事をやっておりまして、8,000歩で1円ということで、毎日それも使わせていただいております。

・私は長崎県の出身で、高島平という地名を耳にするたびに、長崎出身で高島秋帆という人が土地をもらって大砲の試験をやったということを学生時代から思っていました。先ほどのロゴにも関連して、長崎には思案橋という橋もありまして、私の故郷の平戸にも室町時代の古い橋がそのまま残っています。長崎はご承知のように江戸時代を通じて日本で唯一世界へ開かれていた街でした。世界への窓と言える長崎と縁のある高島平が、先ほど区長がおっしゃったように、東京の創造都市、板橋区、板橋の一角として大きななんか時代の窓口になっているというのは、非常にワクワクとした思いを感じます。

・板橋区加賀の話が先ほどありましたが、加賀の前田藩の下屋敷として知られています。私は加賀についても10年以上関わっており日本語の原点である五十音図が作られたのは加

賀であり、日本語の聖地・加賀を国内外に発信するという活動もしております。

・20 歳から関わっている板橋区は第二の故郷のようなものです。私は大学院の修了後にイギリスとフランスに10 年くらい住んでいました。私の妻はフランス人で、北区と板橋区の境にフランス人学校のリセがあり、私の息子も卒業しています。近年フランス人が沢山板橋区に住み始めています。デザインというところから言えば、ポンピリオ委員のイタリアやフランスというヨーロッパのデザインというのが非常に大きな役割を果たしてきたと思います。

・今、問題になっているのはやっぱり言葉の問題だろうと思います。全て英語でやってしまおうというか、単一化していくような国際語は英語だというようなことで、もう郵便でもフランス語だったものをやめて英語にってしまうとか、方言もどんどんなくなってしまっておりまして、長崎に行ってももう方言も聞くことができなくなりつつあります。しかし、方言とは言語の多様性の面で大事です。私の家はずっと江戸時代の初期から続く能楽師の家で、能楽や謡を教える家です。読み聞かせよりも音読で、どうやって発音するのか、あるいはどういう言葉を使えば人にどう何が伝わるのかを能楽という謡の言葉を使いながら教えてきました。

・教育こそデザインであるという区長の話がありましたが、言葉こそがデザインを作っていく、言葉こそが次の時代を作っていく。その点からも方言を含めた色々な言葉があることをよく知って継承していくことが必要だろうと思います。

・絵本という、イラストあるいはデザインというようなもの。自分の思いをモヤモヤしたという言葉もありましたけども、その自分の中にあるものをどうやって出していくのがデザインだと思います。みんなが東京都の中で、板橋区を最もその世界に誇る生活文化としてのデザインの「まち」にするということ、自分がデザインできるような場を作っていく。そうやって板橋区がすごいポテンシャルを持って自分のデザイン、自分でデザインできるような「まち」になればいいなと思っております。お世話になりますけれども、どうぞよろしくお願いいたします。

(委員)

・区長の説明のロゴの話聞いた時に、板橋区は本気で絵本のまちにしようと思っていると感動しました。あの絵本と絵本がつながって板橋になる強烈なストーリーに感動しました。ストーリーは重要であると思っています。

・日頃、地域資源やリソースを探して本にする仕事が多いです。板橋区では、観光資源を探せっていう命題を受けた時に普通の生活する「まち」でなかなか見つからないのです。しかし、この「まち」を面白がるまち歩きの趣味人のような人がいます。例えば河川を塞いだ暗渠が好きだという趣味を持つ人もいます。その人の後をついていくと、実は河川があり、暗渠だったストーリーが見つかります。

・このストーリーを聞いた途端に、目に見える風景が変わってきます。濃厚なストーリーが見えてきて、路地がものすごく好きになります。愛着が湧いて、次に誰かに語りたく

なります。地域資源を作っていくとは、このような原動力だと最近気づいております。

・このストーリーを追っかけていくってこと非常に重要です。絵本についても色々なプレーヤーがそれぞれあるストーリーを持ってつながる状況が生まれると、この絵本のまちとしては非常に魅力的になると思います。例えば、絵本を作る人、出版する人、印刷する人、読む人、その読む人のためにまた作る人が集まってくる。このようなプレーヤーつながりを持ち始めると思います。

・細かいストーリーが1個1個あり、全体としては一つの産業になる。絵本の展覧会があり、それが見られる図書館などの施設があったりします、これらが実際に絵本をプロデュースして、生み出していくような、仕掛けがあり、一つの産業になれば、「絵本のまち」として非常に有効なものになると思いました。ストーリー探しを行いながら、このような姿を目指していくのが良いとイメージしました。

(委員)

・私はサイエンティストとしてサイエンスの分野でクリエイションや創造をしていると思いました。最近の研究の中で、理化学研究所として外部の大学から学生を受け入れていますが、彼らと話すと体験や経験が不足していると感じることが多々あります。例えば、実験をする際に「半田ごてを使ったことがない」「自転車のパンクを直したことがない」という学生が結構います。そのような学生が最先端の装置を扱うというのは、不思議でもあり、危険でもあります。

・色々な要因がありますが、現在は大学を卒業したばかりの方でも、高校・大学時代がコロナ禍であったため、様々な経験ができていません。学生実験も Zoom で先生がやっているのを見ただけ、実物に触ったことがないという状況です。これは非常に不運なことだと思います。大学生になってからでも影響はありますが、私が最近感じるのは、もっと幼少期から様々な経験をしなければならないのではないかということです。小学校低学年、あるいは幼稚園や保育園の子供たちが、できるだけ色々な体験をし、その中から自分の好きなものや向いているものを知り、人生をデザインしていくことが重要です。

・その一つのきっかけとして、絵本は非常に重要です。小さな子どもが様々な世界に触れるファーストステップになると思います。私もリタイアまでもう少し時間がありますが、リタイア後は最先端の科学ではなく、小さなお子さんに色々なことを教える仕事も良いなと考えています。絵本を一つの題材にして、様々な方が知識を得る場を作るのは非常に素晴らしいと思います。

(委員)

・板橋区の話になりますが、全国的に不登校が増えており、毎年3万人くらいのペースで増加しています。また、孤独死や自殺者も増えており状況は悪化しています。

・産業革命以降、世界では多くの大都市が生まれましたが、それまでに人類が経験しなかった問題、例えば人種差別、貧困、ネグレクトなどが一気に噴出しました。当時の科学者や文学者はどう解決するかを模索し、田園都市構想などが作られましたが、大都市の中で起

きた問題は大都市の中では解決しないのではないかと、私はずっと諦めていました。

・もしかしたら、人類が生み出した音楽や演劇といったものが、孤独と人を結びつけ、効果があるのではないかと考えていました。以前 NHK で、音楽や演劇を持たなかったネアンデルタール人は絶滅し、それらを持っていたホモ・サピエンスは生き残ったという解釈が紹介されていました。おそらく、子どもたちが育つ様子を見て親たちが号泣するように、様々な感情が人類に生まれ、協力体制をとっていったのだと思います。文化とは人類を生き延びさせるための協力システムなのだと最近考えています。

・一方で、ドイツで子供たちが「スマホを見ないで僕たちを見て」というデモを起こしたというエピソードがあります。おそらくそういったことが、現代の孤独を作っているのではないかと思います。それを取り戻すには、どうしても演劇や音楽の力が必要です。

・現在、様々な方に協力を願い、宮城委員にも協力いただいて、子供たちの演劇団や合唱団を作ってもらっています。そうやって親子関係を修復できたのではないかと感じています。また、ポンピリオ委員にも手伝ってもらおうと思っていますがポンピリオ委員のお母様が板橋区出身、お父様がボローニャ出身で、彼はジョンソンタウンの歴史などを勉強されており板橋区の子供たちを正常な方向へ導いてくれるのではないかと期待しています。

・板橋区の「夢企画」として、第七小学校の跡地で子供たちの夢の学校を実施する計画を進めています。また、川崎では「川崎子どもステージ」という企画を昨年からはじめ、高校生に演劇と合唱をやってもらったところ、地域の方が非常に驚き、応援体制をとってくれました。

・このように、子供たちの育ちを感動的に捉えられるように文化を取り戻すだけで、未来は開けてくるのではないかという気がしています。佐々木顧問が書かれた本の中に「創造的な問題解決」という言葉がありますが、創造性とは人と人との争いをやめさせる部分で発揮されるべきではないかと思っています。戦争を簡単に起こすことはできても、やめさせる方法を考えた人はいません。争いをやめさせ、子供たちの方を向かせるようなデザインや活動が役立っていけば良いと考えています。

(委員)

・私も静岡や群馬、川崎へ渡辺委員とご一緒させていただきました。まちづくりの中で、演劇やコンサートといったものが非常に大事だと考えていらっしゃることを知りました。

・なぜ大事なのかを考えると、一つはストーリーがあり、時間軸ができることになります。もう一つは、素朴なことですが、一箇所にたくさんの人が集まるということが、「見える化」において大事なのではないかと思っています。どんなに豊かなものが身近にあっても、それがバラバラに存在しているのではなく、一箇所に 250 人集まるようなことが時々あることが重要です。

・人が集まる効果として、昔の共同体ではお祭りがその役割を果たしていました。皆で同じ行動をとることで同一性を確認し安心していただけです。しかし、都市においては正反対のことが起こります。同じものを見ても、ある人は笑い、ある人は怒り、ある人は泣いて

いる。こんなに人は違うのだということが、集まらなければ分かりません。集まって同じものを見るからこそ、「こんなに人は違うのだ」ということが分かります。

・これだけ人が違うということは、むしろ都市の面白さであり魅力です。先ほど「なぜ人類は生き延びたのか」という話がありましたが、自分と異なる文化を持っている人に興味を持つということが、人類を滅ぼさなかった最大のポイントだろうと思っています。人は同一性の中で安心するという本能がある一方で、異質なものへの興味も持っています。

・例えば日本の歴史を見ても、奈良時代に仏教が入ってきた時や、安土桃山時代にキリスト教やポリフォニー音楽が入ってきた時など、当時の日本人にとってとんでもなく異質なものでしたが、強い興味を持ちました。九州には音楽学校までできたほどです。これほど異質な文化に対する興味は、人間に奥深くあるものです。人と出会うことによって他者と自分が、いかに違うかを確認していくこともまた、都市が持続していくための重要な要件ではないかと思います。

(委員)

・他の方のお話を伺っていて、私自身の体験は少ないのですが、大学の方で監事をやっていたことがあります。文科省の研究費をごまかしていないかなどを毎年チェックしに行くのですが、理工学部へ行ってみると、最近は化学の実験セットなんてないと言われます。全部コンピュータシミュレーションで済ませてしまい、実際に物に触ることがないという説明を受け、本当に体験をしていないのだなと強く感じました。

・一箇所に大勢の人が集まると良いというお話については、板橋区では区民まつりと花火大会を実施しており、花火大会には 50 万人くらいが集まります。区民まつりもそのくらい集まるイベントとしてやってはおります。

・当観光協会は、いわゆる観光業そのものではありませんが、観光的な、文化的な伝統芸能などは高島平をはじめ色々あり、神社仏閣でも著名なものがあります。先ほど山口委員のお話にもありましたが、高島平は高島秋帆が砲術訓練を行った場所でもあり、そうした歴史的な背景も含めて、地域資源を活かしていければ良いと考えています。

・板橋区の北側は、古代には海だった地域であり、それより高い場所からは必ず遺跡が出てきます。縄文時代や弥生時代の遺跡が区内各地から発掘されており、その意味では、板橋区には観光資源そのものはあります。主要なエリアが埋立地である地域には、こうした古代遺跡は存在しませんので、その点では板橋の方が優れているとこの前言いました。少なくはない資源があるのです。そういったものを活かしていけば良いのかなと思います。

・少し話題が変わりますが、現在、山本一力さんの『ひむろ飛脚』という本を読んでいます。これは、金沢藩が冬の間に雪を固めて作った氷を、将軍に献上していたという実話をもとにした作品です。この行事は、現在では将軍がいらないため、実際には板橋区役所に氷を届けるという形で再現されています。その出来事が、今回一力さんの作品として書籍化されました。こうしたエピソードも、さまざまな切り口で紹介していくと面白いのではないかと感じました。以上です。

(委員)

・ありがとうございます。プレゼンテーションをうかがい、非常に色々な取り組みが行われていると感じました。特に子どもと言いますか、今回の「橋」ということで、人と人、世代と世代をつないでいく、高齢者の方、子育て世代の方、そして子どもたちといった、世代を横断してつないでいく取り組みがされていました。

・このように、世代をつなぐ取り組みや、先ほどお話にもあったユニバーサルデザインの視点など、さまざまな立場の人々を包含する場が、板橋区内で多様な形で実践されていることが、今回のプレゼンテーションを通じてよく理解できました。

・先ほど佐々木顧問からもお話がありましたが、これらの取り組みを、どのように国際的にも通暎するナラティブなストーリーとして構築していくのかが今後も続いていくと思います。私もまだ具体的なストーリー像を描けているわけではありませんが、その構築に向けて、何らかの形で貢献できればと考えています。短いコメントではありますが、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

(委員)

・お話を聞いて、今すごい刺激を思う存分浴びている状態です。ユネスコの創造都市ネットワークに加盟していくプロセスのタイミングを、今ずっと考えていまして、非常に良いタイミングだと思います。なぜかという、先ほど佐々木顧問が述べられた神戸、名古屋、金沢、旭川の話という形で、様々日本国内でもすでに加盟されている「まち」があります。その中で、多分今私たちが生きているこのタイミングは、もちろん激動の時代っていうのは当然ですが、価値観のシフトの時代にもなっています。私もずっと最近全国を回りながら様々なキープレーヤーたちの取材をさせていただいていますが、やはり大きな転換期が来ているのです。

・今までの私たちの生き方、特にここにいる私も含めてこの世代全体として、反省すべき点が多に多いと感じています。直さなければならない点がたくさんある。ただ、それは同時に一つのチャンスでもあると思っています。価値観のシフトというのは、日本だけでなく世界共通の動きであり、特にコロナを人類全体が経験した後、混乱の時代、争いの時代へと入って、気がつけば非常に不安を感じる時代になってきている。その印象にはメディアの影響も大きいと思います。

・そうした時代の中で、私たちが今手がけようとしている新たな「創造都市」という考え方も含めて、物事を整理しやすい状態にあるのではないかと感じています。具体的に言うと、トレンドやメディアの言説に左右されるのではなく、自分たちが何を求めているのかが、以前よりも明確になってきている時代を、今私たちは生きているのだと思います。

・先ほど区長のお話にもありましたが、人を中心としていくという考え方は、今後のまちづくりにおいて非常に重要なポイントになっていくと思います。また、宮城委員のお話にもありましたが、一箇所に人が集まり、大勢の人が集まることで生まれるエネルギーは、シビックプライドにつながる要素でもあります。

・よく「板橋区ってどんなアイデンティティを持っているのか」と板橋区民の方に聞くと、実はあまり明確な答えが返ってこないことが多い。区民自身も、自分たちのまちのアイデンティティがよく分からないという状況があります。よくある答えとしては、「町中華がとにかく美味しい」という話があります。それはそれで非常に面白いですし、私は真剣に受け止めています。「町中華」というのも、オッケーでありそれは「あり」だと確かに思います。

・しかし、グルメの方向性はあるつつ、今日は「デザイン」というキーワードが多く出ています。人の生活をデザインしていくという視点や、佐々木顧問のお話にあった「ストーリー」というキーワードは非常に重要だと感じています。私自身、高木委員の『板橋マニア』をずっと読ませていただいています。とても参考になりますし、非常に面白い。東京の中でもかなりローカルな香りがあり、そのローカル性こそがアイデンティティにつながっていく要素なのではないかと感じています。そうしたことを、今まさにブレインストーミングしながら考えています。

・区長と少しお話しさせていただいた点では、少し話がずれているのではないかとと思われるかもしれません。ただ、方向性としては、「人を中心とした都市」という考え方が、今後のまちのあり方として世界的な傾向になっています。その中でポイントになるのが、緑化であり、モビリティ、つまり移動手段です。子どもから高齢者までが安全に「まち」に出かけられるインフラ、サイクリストのための環境などが含まれます。

・これらは、私がオランダで研究し学んできた分野でもあります。社会的なバランスを取っていくための要素です。カルチャーや文化といったコンテンツ自体はもちろん重要ですが、それと同時に、その文化的な拠点にどう到達するかというインフラストラクチャーがものすごく重要になります。ここにいらっしゃるのは都市計画や建築家が多いと思いますが、その考え方を俯瞰して見ていらっしゃるのではないかと思います。

・総合的に、少し話が大きく聞こえるかもしれませんが、先ほど区長からも拠点に関するプレゼンテーションがありましたように、文化拠点に到達するプロセスも含めて考えていかなければならないと思います。人間のペースで歩いたり、自転車で移動したりできる環境があることで、まちの経済は大きく発展していきます。新しい商店が生まれ、小さな店舗ができ、スタートアップの若者が働く3坪ほどのコーヒーショップが生まれる。これらはすべて文化そのものです。これらをすべて俯瞰してもう一度整理して考えていかなければと思います。

・最後に、少し前の話になりますが、ニューヨークのセントラルパークにNHKが初めてスタジオを作って2時間の生放送を行ったことがありました。テーマはセントラルパーク、つまり公共空間、パブリックスペースでした。板橋区においても、パブリックスペースに対する考え方を、他の東京のエリアと差別化するのか、あるいは先頭に立って本当にパブリックな空間に戻していくのかの議論ができればと思っています。

・なぜかという1970年代、ニューヨークが財政破綻した際、セントラルパークがニード

ル・パーク化しました。まちが運営できないということになりましたが、その時に市民が立ち上がり、お金のない人はショベルを持ち込み、お金のある人は資金を提供し、整備が始まりました。現在もその NGO が運営し、一般市民を巻き込みながらパブリックスペースが運営されています。こうした考え方は、シビックプライドにつながり、「まち」のアイデンティティを育てていく要素になると思います。この会議の延長線上で、区民をどう巻き込み、どう参加してもらうのかという点も、今後パーツごとに必要になってくるのではないかと、今日さまざまなお話を聞きながら感じました。以上です。ありがとうございました。

(会長)

・ありがとうございます。各委員から、半年分ほどの議論の種をいただいたのではないかと感じています。本当に多くのキーワードをいただきましたので、ぜひ事務局の皆さまには、どれ一つとしてこぼれ落ちることのないよう記録にまとめていただき、今後さまざまな場での議論の種として活喚していただければと思います。

・最後になりますが、私からも一言だけ申し上げさせてください。どなたかがすでに触れていらっしゃったら控えようと思っていたのですが、ぜひお伝えしたいと思います。クリエイターそのもの、特に絵本で言えば、絵本コンテンツのクリエイションに関わる方々が、「ここなら永住しても良いかな」と思うような拠点をつくっていただきたいということです。永住である必要はありませんが、例えばアーティスト・イン・レジデンスのような形も考えられるのではないかと思います。

・もう一つあります。プロフィールには書いていないのですが、ここ 7～8 年ほど、音楽大学で教員を務めています。音楽そのものを教えられないのですし、カラオケも歌えません。ただ、芸術史を教えています。その立場から音大生を見ていて強く感じるのは、クリエイターやアーティストにとって、圧倒的に大切なのは、発表の場があることだという点です。先生がいることももちろん大事ですが、それ以上に、自分たちの表現を発表できる場があることが非常に重要だと感じています。

・絵本制作に関して言えば、板橋には発表の場がすでに多く存在していると思います。その発表の場を活喚し、発表する人たちが自然と集まってくるような拠点ができれば、非常に良いエコシステムが生まれるのではないかと期待しています。私からこんな一意見があったとして、ぜひ記録に残していただければと思います。ありがとうございます。

・それでは議事に戻ります。時間も限られておりますが、この後、事務局の方からご説明いただく事項があります。議事次第の「6. 板橋区創造都市推進基本方針の策定について」、ロゴの説明等を含めてご説明をいただきたいと思います。時間の許す範囲でお願いいたします。

6. 板橋区創造都市推進基本方針の策定について

(事務局)：資料3について説明した。

・板橋区の新たな基本構想に合わせて新たにオフィシャルロゴを作成した。

・「みんなに架け橋 板橋創造都市宣言」は、板橋区の今後の街づくりにおける価値観と方向性を示す重要なメッセージであることを説明した。

・3つの重点項目として「人と人との繋がりを育む」「人と街、文化と産業を繋げる」「世界を繋ぎ、未来を拓く」を掲げている。

・オフィシャルロゴと創造都市宣言は、年明け1月下旬に区長の記者会見で公式に発表する予定である。(委員限りの情報とする。)

7. 第2回板橋区創造都市推進会議について

(事務局)：資料4について説明した。

・「板橋区創造都市推進基本方針」について説明した。

・創造都市の推進体制として、「創造都市推進会議」と区役所庁内の連絡調整会議による2層体制で、専門的助言を得ながら庁内横断的に推進していく考えであることを説明した。

(会長)

・質疑はありますか。

(委員)

・8分野に演劇が入ってないのはなぜですか。

(顧問)

・憶測ではありますが、文学というジャンルがあります。そこに最初に加盟したのはエディンバラです。エディンバラ演劇祭をご存知でしょう。演劇は舞台芸術でもあり、ブックでもあります。広く捉えれば文学に入ります。

・舞台芸術というジャンルは、ボローニャなどのスペッタコロでしょうか。ボローニャ大学にDAMS(ダームス)というのがあり、それはミュージック、スペッタコロ、アーツなどです。日本のジャンル分けとは少し違うかもしれません。オペラなどもミュージックに入ります。

(委員)

・文字だけのものと、読み聞かせという絵本の世界があります。オーラル文化です。合唱と演劇はそのオーラル文化なのです。文字だけというのは、下手をすると非難したり、受け手によっては意味が違って聞こえたりします。やはりオーラルや表情によって本当の意味が伝わるという感じです。演劇というのはそちらの文化だと思います。発生からいけば朗読です。私は絵本の読み聞かせと合唱と演劇はセットになると思っていました。

8. 閉会

(事務局)

・次回会議は3月27日の18時からを予定している。

(会長)

・第1回板橋区創造都市推進会議を閉会する。